

楽園の島々の

■文化人類学三浦研究室■2006/10■



■南の楽園フィリピン 青く透明な空、紺色の海、無数の珊瑚のかけらの白い砂浜。緑の木々と赤や黄色の大きな花。フィリピンの島々の自然は、楽園のイメージそのもの。とはいえそこに住む人々は、必ずしも楽園の生活を送っている訳ではない。

■大きな貧富の格差 第二次大戦直後には、間もなく先進国になると言われたフィリピン。しかし、フィリピン国民の半数近くは、今も一日2ドル以下の生活を送る。都市スラムや山間に住む人々は、ほとんど家具もないバラックに住み、多くの若者たちは定職に就けないでいる。しかし中産階級の成長も著しく、首都マニラや地方都市には次々と大きなショッピングモールが建設されている。所得分配の不平等度を示すジニ係数は0.46と、フィリピンは貧富の格差の大きい国なのだ。

■民主主義の理想と現実 貧富の格差は政治にも影響する。独裁者マルコスを追放した1986年のエドサ革命以降、NGOなど市民社会セクターの活躍で、フィリピンでは他の東南アジア諸国に先駆けて民主化が進んだ。その後も、2001年のエドサIIで腐敗したエストラダ大統領を倒すなど、ピープル・パワーは市民社会の成熟を示してきた。しかし、そのエドサIIで大統領に就任したマカパガル＝アロヨであったが、人々は今、その汚職疑惑と消極的な貧困対策に不満を募らせ、大統領は不当逮捕など弾圧を強めている。20世紀前半にアメリカの植民地だったフィリピンでは、民

主主義思想は浸透しているが、貧しい人と豊かな人では、民主主義に求めるものは異なる。豊かな人々は公平なルールの確立と規制の緩和を求め、貧しい人々は寛容と彼らへの共感を求めているのである。

■背景にある伝統的社会秩序 この貧富の対立は、伝統的社会秩序と密接に関係する。海を生活の場とし、漁場や農地を求めて移動して歩いていたフィリピンの人々は、19世紀までは貴族、自由民、奴隷の3階層からなる社会を作っていた。奴隷は、戦争捕虜や犯罪者、借金の返済ができなかった者になったが、しかし一定の権利は認められていた。一方貴族は、慣習法やイスラム法の知識に基づいて争いを仲裁して村をまとめ、自由民たちに施しをし、人々から尊敬を受けていた。今では奴隷はもういないが、自由民たちが貴族に求めたもの、それは「力」を持つものの義務を果たすことであった。そしてそれは、今の貧しい人々が政治家に求めるものでもある。

■社会秩序と「力」の概念 この「力」の概念は東南アジア独特のものである。「力」は禁欲や節制、意識の集中で手に入れられるとされ、「力」を保持するためには人々に惜しみなく富を分け与えなくてはならない。「力」を持てば人々からリーダーと認められるが、もしそのリーダーが放縦や吝嗇により集中を緩めるならば、もはやリーダーとは見なされなくなってしまう。しかも、宇宙における「力」の総量は一定とされるため、別のリーダーが有力となれば、それは現在のリーダーの「力」が失うことを意味する。一般の人々もこのような「力」を受け継いでおり、禁欲や節制、意識の集中は人々の人格の基礎となっている。1898年に、スペインからの独立を目指したフィリピン革命の英雄たちを支え、革命を推進する原動力となったのもこの「力」の概念だった。しかしこの「力」の概念はフィリピンだけではなく、マレー世界に広く見られるものである。マレー世界とは、マレー系言語とマレー的社会秩序を持つ人々の



写真：アローナビーチ／マクタン島の夕暮れ／協同組合の従業員たち／エドサ革命時のアキノ／田植えの準備／エドサII／農家と少年

世界であり、東南アジア島嶼部の大部分がそこに属するが、このマレー世界形成の契機となったのが、13世紀以来の東南アジア海域での交易の発達、特に15世紀の交易国家マラッカ王国の発展である。

■マラッカ王国とヴェネチアの命運 15世紀初頭にマレー半島西部に生まれたマラッカ王国は、ヒンズー教に基礎をおくマジャパヒト王国に対抗してイスラム教を採用し、インドやアラビア、中国からの商人を引きつける貿易都市として、空前の繁栄を遂げた。その交易品は遠くヨーロッパまで運ばれたが、当時、地中海の覇権を握っていたヴェネチア共和国の命運は、マラッカのスルタンが握っていると言われるほどだった。東南アジアの交易の中心となったマラッカでは、慣習法を基礎にした独自のマラッカ法典が編纂され、その法が示す社会秩序は近隣諸国の模範となり、その言語ムラユ語（マレー語）はこの地域のリンガ・フランカ（共通語）となったのである。マラッカ王国は1511年にポルトガルに滅ぼされるが、マラッカで確立された社会秩序は東南アジア各地で生き続け、フィリピン群島もまた、マラッカ王国の交易圏の一部としてムラユ文化を受け継いだ。

■マンダラ的国家 マレー的な「力」の概念は、王を宇宙の中心と見なすインド思想に由来する。東南アジアの諸王国はこの「力」の概念に基づいて編成され、さまざまな王国で宇宙の中心＝王が土地よりも人に対する支配を追い求めた。このような東南アジア的な国家のあり方は、ヨーロッパ的国家とは全く異なり、「マンダラ的国家」と呼ばれている。「力」の概念とマンダラ的国家観は、近代政治制度が導入された20世紀後半以降も、東南アジア諸国の政治家たちの行動の底流となって今日に至っている。

■今日のフィリピン農村の貧困 フィリピンは、南部の一部を除いて、独自の国家が発展する前にスペインにより植民地化されてしまった。しかしマラッカ王国の時代から500年経った今日も、フィリピンの社会秩序は基本的にはマラッカ法典に記された通りのままであり、その人格概念も変わっていない。地方の農民たちの人間関

係も、一方でお互いの「力」を傷つけないようにし、他方で自らの「力」を失わないようにすることで成り立っている。ここでは金権選挙は日常茶飯事だが、それは、かつての貴族のように富を分配しなければ、政治家は「力」を得られないからである。とはいえ500年前と現在では大きな違いがある。スペインとアメリカの植民地時代に、政府に保護されて豊かになった今の富裕層は、かつての貴族と違い、経済人同士の平等性に基づく、資本主義的な価値を追求しているからである。そして彼らがフィリピン市民社会の主要な担い手なのである。

■貧困解決の道 しかし、すでに大きな貧富の格差がある時、資本主義的価値の追求は現実には貧困層の切り捨てを生み出す。かくして、お互いに支え合った19世紀までの自由民と貴族とは異なり、今日の富裕層と貧困層とは相補的ではなくなり、貧困層は忘れ去られていく。こうした状況では、貧しい人たちが自分でケイパビリティ向上を目指せるような社会開発が、社会発展には不可欠である。協同組合もそうした試みの一つである。しかし19世紀末以来、多くの信用組合が作られてきたが、その多くは（特に貧困層の間では）失敗に終わっている。失敗の原因は、ヨーロッパ生まれの協同組合（信用組合）のモデルを理想化して、そのままフィリピンに適用したことにある。そのため、フィリピンの社会秩序に即した協同組合の設立が望まれる。

■フィリピン的協同組合の可能性 伝統的社会秩序を考慮すると、ここでは信用活動はマレー的上下関係を作ってしまうことが分かる。貧困削減のためにはむしろ、

農民たちの互いの生産活動を有機的に結びつけ、農民の横の連携を強化する協同組合を作り上げる必要がある。



■MIURACULTURALANTHROPOLOGY ■Oct.2006 ■

困難な日々